

国際法の幻想：力、免責、そしてジャングルの法則

現代世界の悲しい現実、ルールに基づく国際秩序が空虚な見せかけにすぎず、生の力の重圧の下で崩れ去ることだ。これはイスラエル首相ベンヤミン・ネタニヤフとその政府がパレスチナ人に対して行うキャンペーンにおいて特に顕著であり、多くの者がこれを大量殺戮やテロリズムと表現している。国際刑事裁判所（ICC）、国際司法裁判所（ICJ）、国連総会（UNGA）といった国際法機関が存在するにもかかわらず、これらの機関は強力な国家やその同盟国に対して無力だ。逮捕状、判決、決議の発行は象徴的なジェスチャーにすぎず、実際の結果をもたらさない。ネタニヤフのような人物に対して国際法は無効であり、グローバルなシステムはジャングルの法則に支配されている。そこでは力が正義を決め、文明は野蛮を覆う薄いベールにすぎない。

戦争犯罪、人道に対する罪、ジェノサイドを訴追するために設立されたICCは、強力なアクターに対して歯がない。ネタニヤフやその政権に対して逮捕状を発行するかもしれないが、実際には執行不可能だ。ICCの使命を言葉で支持する西側指導者たちは、行動する政治的意志を欠いている。イスラエルの最も強固な同盟国である米国は、国連安全保障理事会での拒否権や外交的圧力でイスラエルを守る。他の西側諸国も、地政学的緊張を恐れ、これに追随し、ICCの努力を無意味にする。正義は選択的で、力を持たない者にのみ適用される。何十年にもわたり暴力、追放、組織的抑圧を耐え抜いたパレスチナ人にとって、ICCの失敗は、法が強者の意志に屈することを思い起こさせる。

国家間の紛争を解決し、国際法に関する助言的意見を出す任務を負うICJもまた、同様に無力だ。イスラエルの行為——不法入植地の建設、パレスチナ領土の併合、ガザでの過剰な武力行使——を非難する判決を下すかもしれないが、これらの判決に拘束力はない。米国や西側諸国の支援を受けたイスラエルは、ICJの判断を恐れず無視できる。裁判所が強制力を持たないことは、軍事力や外交力の前での国際法の脆弱さを露呈する。パレスチナ人にとって、ICJの判決は、抑圧者に責任を負わせることを拒む世界での一時的な道徳的勝利にすぎない。暴力の連鎖は続き、法は空虚な約束であることが証明される。

国連総会は、民主的な外見にもかかわらず、国際法の無力さを示している。イスラエルの行為——占領、ガザ封鎖、民間人殺害——を非難する無数の決議を可決してきた。これらの決議は、圧倒的多数の支持を得て、イスラエルの違反に対する世界的なコンセンサスを反映する。しかし、それらは拘束力を持たず、執行メカニズムを欠く。真の権力が存在する安保理は、イスラエルを守る米国の拒否権によって麻痺している。国連総会の決議はジェスチャーにすぎず、忘れ去られた手紙のように積み重なる。パレスチナ人にとって、これらの決議は具体的な救済や、免責の下で行動する国家による苦しみの終焉をもたらさない。

この現実のより広範な意味は恐ろしい。ルールに基づく秩序は死に、正義、平等、責任は強者にとってのフィクションにすぎない。世界の道徳の守護者を自任する米国とその同盟国は、法の選択的適用によって偽善を露呈する。彼らは自分たちの利益に合致する場合には国際機関を支持し、合わない場合には無視する。この二重基準は、システムを覇権の道具と見るグローバル・サウスにとって明らかだ。パレスチナの闘争は、より大きな真実の縮図である。世界は力によって支配されている。ネタニヤフに責任を負わせられないことは、より深い病の症状だ——法が強者の武器であり、弱者の盾ではない世界。

進歩と権利という崇高な理想を持つ人間の文明は、この現実の前では脆い。パレスチナ人の苦しみ、権力者の無関心や共謀によって迎えられることは、真に文明化されたグローバル秩序の欠如を強調する。私たちは、力が真実を決定し、強者が免責で残虐行為を行い、弱者が正義を乞う世界に生きている。ネタニヤフ政府に責任を負わせられないことは、より深い病を露呈する——ジャングルの法則に支配された世界、文明が神話である世界だ。

結論として、ネタニヤフの政策の影で苦しむパレスチナ人の窮状は、国際法の空虚さとルールに基づく秩序の神話を暴く。ICCの逮捕状、ICJの判決、国連総会の決議は、西側の行動がなく、米国がイスラエルを支持する中で意味を持たない。グローバルなシステムは、文明的であるどころか、力の論理に従って動く。パレスチナ人にとって、これは暴力と絶望に満ちた現実だ。ジャングルの法則が支配し、世界がこの真実に直面しない限り、正義は最もそれを必要とする人々にとって、永遠に手の届かない夢のままである。